



## 学校とは ③共同経営者

離職率が高いコールセンターでは、常に人員が不足しているため、残業が慢性化していたり、休みの調整が取り辛くなったりするそうです。そのため、オペレーターの満足度が下がり、更なる離職を招く可能性も出てきます。また、新人が入るとその分サポート業務が増えることで、管理者の負担も増大してしまいます。この一文の中の「コールセンター」を「学校」に、「オペレーター」を「教員」に置き換えると、まさに今の学校が抱えている問題に直面します。購買者からはクレームの嵐、説明に努めてもなかなか受け入れてもらえない。会社からは「怒らない、あやまること」と指示され、オペレーターはサンドバッグ状態になり、追い込まれ、耐えられなくなって退職に至るケースが多いそうです。さらに、「購買者」を「保護者」、「会社」を「教育委員会」に置き換えると教育現場の現状と重なる部分が多くなります。

かつて教職の仕事は、人気の職業と言われていて、倍率も高く、中々合格しない時代もありました。しかし、授業準備はもちろん、生徒指導、保護者対応、膨大な事務処理・研修・会議の数々…現在の教育現場は多忙を極め、教員に大きな負担をかけています。ある自治体が県内の教員を対象に行ったアンケートで、「教員としての本来の仕事を阻害していることや無駄な作業」について調べると、部活動、保護者対応、行事等が課題として浮き彫りになりました。こういった課題も手伝ってか、多くの自治体の教員採用試験では低倍率となり、合格しても、その後辞退して民間企業の内定を承諾する学生もいます。学生たちもSNSで教職についてのマイナスの側面ばかりの情報にふれているようです。熊本市も例外ではなく、今年度の教員採用数は297人で採用予定枠を17人も下回ったそうです。

しかし、そのような中でも必死に努力し、学校を子供たちの活躍する場所、そして居場所となるように、日々研鑽を積む教職員もいるのです。そこで、学校を真の働き方改革に繋げていくために、学校を教員・子供たちだけで運営していくのではなく、学校を教員・子供、家庭・地域で共に運営に参画していく共同経営者の気概を持っていただけると大変ありがたいです。この共同経営者とは、学校を支援していただく学校応援団とも言い換えることができます。

前述したコールセンターですが、そこには商品へのクレームが殆どです。子供は、工場から出荷された商品ではなく、家庭から学校へ「登校」し、学校から家庭へ下校する生身の人間です。当然、発達上未成熟な子供たちが集団生活をするとこころですので、子供同士のトラブルは、日々どこかで起きています。これは当たり前のことなのです。時に、子供は学校であったことを家庭の中で話すこともあると思います。これは教員をしてきた経験ですが、子供たちが話すことは「ウソではないが、正確ではない」ことや「前後を切り取って一部分を切り取って話す」こともあります。だから「子供の言うことを信じる」＝「鵜呑みにする」こととしないで欲しいのです。



そこで、家庭で気になることがありましたら、クレームではなく相談をしてください。相談に対しては、丁寧に対応し真剣に解決策を見出します。学校の共同経営者としてまた、学校応援団として、一方的に攻撃するのではなく、互いの抱える問題を双方の責任において解決していこうとする考え方、態度が求められます。学校からご家庭にクレームを言うことは絶対にありません。これは共同経営者としてのモラルとして考えているからです。

この学校応援団の姿を帯西校区ではたくさん見ることができます。地域の餅つきや伝承遊び、帯西応援隊、PTAの取組や保護者の方々の朝の旗振り、下校の見守り、ぐりぐらの読み聞かせ等々、応援されることで子供たちも健全に育っていると実感でき、帯西の「わくわく」に近づいているのです。